

山形短期大学民話研究センター資料叢書

なら梨とり

赤湯の昔話

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

なら梨とり

赤湯の昔話

編
武
田
正

ぞうりかくしきんによ きんによと

卵ひめよし さいてもさいても

さかんとせつせ

赤湯さ行くどて

赤いじよじよ なくした

姉さ買ってけろ 買ってけろ

赤湯地方のぞうりかくし唄

「置賜のわらべうた」より

調 査

米沢東高等学校 二年

鈴木光子
安部正子
根津悦子

1 瓜姫子と天邪鬼

むかし、おじいさんとおばあさんだったと。その子の瓜姫子は機織り上手だったと。

「今日、町さ用あつて行つてくつから、天邪鬼来て機織り見せろと言わつたて、決して戸を開けんなよ、決して戸を開けんなよ」

と、瓜姫子さ言うて行つたと。

んだけんど、天邪鬼は聞かないで、

「開けろ、開けろ、開けろ、ちいとてええから開けろ」

と言うので、ほんに僅か開けたばりで、そこからびりびりと入り込んで、瓜姫子どこを殺して、縁の下さ置いて、天邪鬼は自分が瓜姫子になって、一生懸命で機織りしつたと。そうしたところさ、夕方になって、おばあさんだち帰つて来て、

「瓜姫子」と呼ばつてみたらば、「はい」と返事して、行つてみたらば、化物なもんだから、魂^{たまげ}消て、

「天邪鬼だこれ」

と思つて、「これはしたり、これはしたり」と思つて、瓜姫子は何処さ行つたべと思つて、そこらここら探したれば、縁の下さあつたと。

空飛んであるくカラスあ、

瓜姫子の機さ

あまのじゃく 乗りこんで

キーコ・パタン

と、三回啼いたと。

そして、おじいさんとおばあさん、くやしくて泣いたと。とうびんと。

(宮原 山崎みやの)

後半に「天邪鬼を殺してソバ畑または萱野に投げて来たのでソバの根または萱の根が赤いのだ」という話が抜けている。

2 蛇 舁 入

むかし、うんと日照りの時に、水掛けらんねで、百姓が田さ行つて眺めつたところが、蛇が出てきたんだと。

「じんつあ、じんつあ、水掛けらんねごんだら、オレあ掛けて呉^けつから、オレと約束すねが」

とだと。

「娘一人、オレんどこさ嫁に呉^くれねが」

そうすつど、水掛けて貰^{もら}われるばりええくて、約束したんだと。

「三人いた娘だら、一人ぐらいええがんべから呉^くれる」

とだと。そして約束してから、

「困ったこと言つたもんだ。娘に嫌^{やん}だと言わつたらば、困ったごんだ」

と思つて寝て、次の朝に行つてみたらば、だつぷり水掛つたごんだと。そして、
「なんだ、じんつあ、水掛けたから、約束の娘一人呉^くれつか」

と言わっだごんだと。そうすつど、困ったわけだごで。娘さ相談しないでこういうことを言つたもんだから。家さ帰つて来て、蒲団かぶつて寝つたごんだと。

そうすつど、朝あの御飯おま出たもんだから、一番上の娘が、

「オトツツア、オトツツア、御飯あがれ」

と迎えに行つたごんだと。

「オレ、こういうこととして、蛇に水掛けてもらつて、娘一人呉れつことに約束したば、水いっぱい掛けてもらつたなよ」

とだと。そしてその娘さ、

「お前、蛇んどさ嫁に行つて呉けねか」

と言うたんだと。そしたば、

「何語えつてゐるんだか、この腐くつされじんじあ、蛇の嫁になつてられんめえちやえ」

と言わっだごんだと。そうすつど、二番めの娘起こしに來たんだと。二番めの娘にも同じこと言うたんだと。そうすつど、二番めの娘にもけなけななささつだんだと。

「困ったもんだ、いま一人しかないんだ。いま一人に嫌やんだと言わったら、な
んとも仕様ない」

と思つていたらば、末の娘あ起しに來たもんだと。そしたらば、

「こういうことで水掛けてもらつたげんと、姉あねさだ二人承知してもらわんねんだ、
困つたごんだ。お前オレの頼み聞いて呉くねか」

と言つたらば、末娘はやさしい娘だつたほたでに、承知して呉れたんだと。ただ
嫁入りに頼みあると、

「フクベンを千せんと針千本、嫁入り仕度に呉れろ」

と言つて、そいつを持たつて、池さ入つて行つたんだと。そしてそいつを蛇さ吞
ませて、蛇を退治して歸つて來たと。とうびんと。

(大橋 三瓶ちの)

蛇は水の神の使いという考えがないものでもないが、ここでは猿轡入りと同様の話と
なつており、鉄氣に蛇がよわいので、針でさされて死ぬという話となっている。

3 猿 聲 入

（前半同じなので、後半のみ語ってくれた）

その猿の嫁になつて、行つたんだと。嫁入りに行く途中、きれいに咲いた桜の花、天峯てんみねに咲いたと。そこで駕籠を止めて、

「桜一枝欲しい」

と言つたと。そうすつど、自分が好きで貰つた嫁だから、木に登るのなど大得意だしよ、

「ほ・だ・ら、オレとつてきて呉れる」

と言つて、わ・ら・わ・らと高い木に登つて、

「あそこでないな、こっちのよ」

と、段々とシンポエさまで登らせて、シンポエの木が折れて、ざぶんと落ちて死んだと。

（大橋 川井遠江）

この話は猿に嫁入って三ツ目で里がえりする日とか、三月三日の節句ということになっているのが一般であり、里の父が餅が好きなので餅をつけて臼がらみ背負って来ることになっている。また猿が川に流れるとき、猿が「川に流るる生命はおしくなけれども、後にのこりし姫恋しや」等の唄をうたう小国町の昔話が見られる。

4 糠 福 米 福

糠福は前のおっかさんの子供で、米福は今のおっかさんの子供だったど。そして栗拾いにやられっけんど、おっかさんは米福さ、

「お前は小っちゃいから、姉さの後ばり行けよ」と言ったと。

糠福の方は底のない袋あずけたので、なんぼ拾っても溜んねがったげんど、その後ついて行く米福の方は、姉さの後拾って歩いたと。んだと、妹の方のばり

いっぱい溜るもんだから、ええ頃たまつたから、米福は、

「家さあえべは（帰ろうよ）」

と言うと、

「オレ、なんぼ拾つても溜んねし、帰るとおっかさんに怒られるばかりだから、オレはこのまま家さもどらんね」

と言うたと。そして姉さは家さ来ねで、ずうつと山の奥さ、当てどなく歩いて行つたら、大きな堤みたいなあつたと。その堤の向うから、何か魂みたいなものが、堤を泳いで来たと。そうすつど晩方だべし、糠福は「オツカナイ、オツカナイ」と泣いたと。

「オツカナクない、おっかさだから、オツカナクない」

と魂みたいなものと言うたと。んだもんだから逃げないでいたらば、そいつが糠福のおっかさんの魂で、

「何でもお前の欲しいものあつときは、こいつを三べん振るずと、何でも出つから」

と打出の小槌、呉れらったと。そしてその打出の小槌もらって来たもんだから、
こんどは家さ大急ぎで来て、

「栗出すから、蓆敷いておくやい」

と言うたげんど、「一人で敷いてしろ」と言わつて、一人で蓆敷いて、栗を出したと。

そのうち、お祭り来たらば、おっかさんは自分の子供の米福ばりつれて、お祭り見に行つたんだと。糠福は米搗きしつたげんど、お祭りさ行きたくて、ええ衣裳を打出の小槌で出して、駕籠も出して、駕籠さのつてお姫さまみたいにして行つたと。そうすつど、おっかさんと米福がお祭り見しつたのを駕籠の中から見て、あんまり憎らしいので、瓜の皮ぶつつけてくれたんだと。そうすつど米福はその瓜の皮くれらつたんだと思つて、拾つて食つたんだと。糠福はわらわら駕籠の中からお祭りを見て、一足先に帰つて来て、一生懸命米搗きしつたと。

妹が帰つて来て、

「いやいや、今日、お祭り見に行つてお姫さまに瓜の皮もらつて食つて来た」

と教えた。

「そんじや、お前ばりええがつたな」

と言うて、知らない振りして稼いでいた。んだから、おっかさんにとってもいじめられっけんど打出の小槌で幸福に暮したと。とうびんと。

(宮原 山崎ヨシエ)

お祭りの芝居を見に行つて糠福が殿様にみそめられて、嫁に所望されて、家に来ると、殿様の家来が来て、米福を殿様の嫁にしようと母親と問答する。その後で糠福が駕籠にのつて嫁に行く。米福可哀さに、池の廻りをゴザにのせて母が引きずって行つて米福を池に落してしまう話が、白鷹町・小国町で採集されている。

5 お糸 唐糸

お糸と唐糸のこして、おつかさんが死んでしまったと。それからおとつつあんが後妻おつかさんもらったんだと。そして後妻おつかさんが意地わるくて、おとつつあんが稼ぎに出た後に、いじめられるわけだと。

ある日のこと。お糸と唐糸が二人で相談して、なんぼ家の手使いなどして働いても、こがえに助けても助けても、おつかさんが怒ってばかりいてさっぱり面白くないから、オレだ何処さか逃げて行くべと、晩方家さ夜上りしないで、二人で山の方さ行ったんだと。

山さ入る手前に、すばらしいな川原あつて、大きな橋掛つていたんだと。その川原さ。そうすつど、仕様ないもんだから、川原橋の下ならば、何とか雨降つて来たてもしのがれるというわけで、二人でそこさ宿とつたんだごで。

暗くなつてから、おとつつあんが稼ぎから帰つて来て、

「お糸・唐糸、何処さ行った」

と、おつかさんさ聞いたんだごで。んだげんども、そのおつかさんは知らないふりして、

「何処さ行つたか知らね」

と言うたと。おとつつあんだって常々うすうす分つてやんべから、まずへ確か
そげな気持でも起したんだべというわけで、む・ご・さ・く・て泣いて目が見えなくなつ
たんだど。そうすつど、六部さまになつて、おとつつあんが探し当てつからとい
うわけで、鉦かねならしてずつと行つたれば、

「お糸唐糸、いたならば、この目はばつちりあくのだ」
と行つたと。

暗くなる頃、その橋さ通り掛つたば、その橋の下から聞きなれた親で、

「おとつつあんでないか」

と二人出て来たと。そうすつど、おとつつあんは、

「なしてお前だ、こげなどこさ来た」

というわけで、親子三人で嬉し泣きに泣いたと。そして「こげなとこにいらん

ねがら、家さあえべ」とおとつあんが言う^{こつしやえて}と、その子供は、
「どうせ、なんぼ手使つても、おつかさんがオラだどこ怒^こつてばりいるし、行かねはあ」

と言つたんだと。

「んじやらば、家に帰らんねんだらば、お月さまとお星さまになつて、空さ登つてあえべはあ、オレはお天道さまになつて行くから」

と、空さ登つて行つたつてよ。そうすつど、意地のわるいおつかさんはモグラモチになつてしまつたと。んだから、モグラモチで、お天道さまの光に当つどこさ出ると死ぬから、穴の中さばりいんだと。とうびんと。

(宮原 山崎ヨシエ)

お糸が先妻の子、唐糸が後妻の子で、二人は大変仲よかったが、母はお糸を憎んで、人になので山に埋めてしまう。そのとき、お糸はケシの種を道々蒔いて行く。次の春に花が咲いたのを唐糸が見つけて救うという話が米沢市に採集されている。赤湯のこの話は「お月・お星」の話が「お糸唐糸」という名で語られているものと考えられる。

6 まま子いじめ

むかし、馬子してる男が男の子一人もって、妻かかに逝くならっだんだと。そして後妻あとかか迎えたんだと。その後妻にまた女の子が二人いたんだと。

冬寒くなる節になつて、

「寒くなるから子どもらに綿買つて来て、綿入れこしや拵こしらえて着せろ」

と親父が綿買う金あずけたんだと。そうすつど後妻は綿買つて来て、衣裳拵こしらえて呉けたんだと。そして自分の子にばかり綿を入れて、先妻の子に藁屑こやし入れて着せつたんだと。んだけんど、男の子だから知らねで、おとなしい子どもだったから、黙っていたんだと。

ある日、手使いに、馬子の綱引つ張りさせらつたと。そして遠いところに行くとき、着物温かくないもんだから、手凍こえて綱はずすこんだと。そうすつど、

「なんだ、とぼけてばっかりいる」

というて、背中バサツと叩いたれば、藁屑こやしだつたと。そうすつど、親父ごしや怒えつて家

さ来て、お・か・たの髪かみの毛、ぎりぎり引張つて、

「お前みたいな者、家さ置かんねから出て行け」

と外さ出したんだと。そしたら、先妻の子は親父どこ押えて、

「決しておつかさんを何処さも出してやんねでおくやい」

と止めたと。

「なして、お前。お前どこに藁屑わらくずばり入れて着せるようなおつかさんを、それほどお前は引き止めておきたいのか」

と言うたら、

「この親なればこそ、オレ一人、藁屑わらくず着てすむ、この上、このおつかさんに出て行かつて、別なおつかさんがこの家に入つて来たことなれば、オレ一人ですむもの、妹二人まで藁屑わらくず入った衣裳いさう着んなねでないか」

とだと。親父も涙なみだこぼして感心したと。それから継母よめも改心して立派な人になつたと。

(大橋 三瓶ちの)

この話は昔話というよりも事実をもとにした話であろうと思われ、昔話のもつ、モチーフは似ているが、ストーリーの面白さがなく、教訓的な色彩が強い。

7 蜂 出 世

ある日、子どもら二人三人して、蜂^{すがり}とつて、いまいま殺すべに掛つていたところに、通りかかった男いたつたと。その男は、

「お前だ、なんだ。そがえいじめて蜂あ死ぬでないか。むごさい。（可哀そう）そんなじゃ、その蜂三銭で買うから……」

と、金をやつたわけだぞな。そして、金を呉れたら、子どもらは金もらつたもんだから、喜んで蜂をその男のとこさ渡したわけだ。蜂はぶーんと飛んで行つたどはあ。どこさ飛んで行つたか、わかんねげんど……。

ある家で聳とりだつたと。その家はすばらしい財産家の山持ちなもんだから、

「この杉林の杉の木数えた人を、オラどこの簪にすっから」と言うたもんだと。

誰が行っても、杉の木は数えらんねがったんだそうだ。あんまりいっぱいだよ。そうすつど、その男は、

「ほんじゃ、オレ行つて数えて来る」

と行つたところが、蜂がぶーんと飛んで来て、杉の木の数、数えたと。

「三万三千三百三十三本だ」

と蜂は教えた。そうすつど、その男が大金持の簪になれるもんだと思つて、喜んで行つたというわけだ。そして、

「数えて来たか」

と旦那に言わつて、

「数えて来ました」

「何本あつて？」

「三万三千三百三十三本だ」

「ほんじゃ、お前、当ててくれたから、オラとこの簀になつてけろ」

と言わつて、大金持の簀になつたと。とうびんと。

(宮原 山崎みやの)

財宝発見話のうち、「味噌かい橋」や「藁しべ長者」系のもので、置賜地方では初めての発見であつて、貴重である。

8 笠 地 蔵

あるとき、おじいさんとおばあさんと、凍み豆腐作つて町さ売りに行つていたと。おじいさんがツメぎわ(大晦日に近い日)になつて、帰りかけに村の入口に地蔵さまが立つてござつたんだと。その地蔵さまが、まず節も節なもんで、雪落ちて来るもんで、真白になつてゐるもんだから、売上げの錢でクゴ帽子(クゴで編んだ防寒具)買つて、おじいさんが地蔵さまさ着せて来たんだと。

そうすつど、おばあさんは、おじいさんが銭を持って来ると思つて待つていたんだごで、

「今日は、こういう訳で、お地藏さま、あんまり雪に埋もつてむごさいようだったから、クゴ帽子買つて着せて来たから、銭は一銭も持つてこね」と言うたど。

「ほんじゃ、ええことしたなだも、今日など御飯^{おま}など食^かねつたつて、味噌煮にしても食うべ」

というわけで、おじいさんとおばあさんは、晩方になつてから、少し残つていた御飯を味噌煮にして食つたんだと。

そして、寝たば、

「けんぞうじい」

と何か来たと。気味わるくて、二人して、

「何者来たんだべな」

と語つてたげんど、二人ですくだまつておかなくていたらば、段々、その音が

家さ近づいて来るなだと。そして、「ガラー」と戸開けて、何か「ザザー」とすばらしい音して置いて行っただと。何だべと思つたげんど、とにかく気味わるいもんだから、まず明るくなるのばり待っていたんだと。

明るくなつてから、起きて来て見たれば、すばらしい小判の山が台所さ積つていたんだと。クゴ帽子のお礼に、小判置いて行っただと。

その小判を使つて、おじいさんとおばあさんはうんと幸わせに暮したど。んだから何でも親切にさんなねもんだと。

(宮原 山崎ヨシエ)

東北地方の代表的な昔話で、置賜全域どこでも聞かれるものであるが、その地方により、地藏の数が六地藏であつたり、ツメ買物に行く場所がその地方の中心地となるし、地藏さまにかぶせるものも地方の特色を示す。尚「上野」での話もクゴ帽子をかぶせるという点では同じであつた。

9 大歳の火

大晦日に火種切らさねもんだと、言うたもんだと。そこで、その家で、嫁さ、「オラ家では、今夜、火種切らさねでおかんね」

と言うもんだから、嫁も火種切らさんねどていた内に、眠・む・た・く・な・つ・て、眠・む・た・く・な・つ・て、とうとう眠てるひまに、火種なくなつてしまつて、はつと思つて起きて、魂消て、外さ出て、何処か火種あつかと思つていたら、向うにぽかっと、灯り一軒あるというわけだと。

そして、その家さ行つて火種を願つたどこ、

「火種など呉れっから、この菰さ包んだの、死人だけど、背負つてつておくやい」と言わつたんだと。その包みはすばらしく重たいのだったと。嫁だから火種なくすなんてさんねし、気味わるくても仕方なく、背負つて来て開けてみたら、小判がざくざく入つていたつくと。

んだから、心持ちがよく家風を守るので小判がさずかつたんだと。

10 なら梨とり (一)

むかしあつたけずまなあ。

ば・っ・ち・や・に太郎と次郎と三太郎という兄弟いたつたど。そしてば・っ・ち・や・塩梅
わるくて寝つたとき、

「何か食いたいのないか」

と、孫ども聞いたと。そうすつど、ばっちやは、

「何も食いたくないんだげんど、なら梨なら食つてみたい」

と言つたと。そうすつど、孫の一番大きい太郎は、梨とりに行つたと。

そして行つたら、年寄りの鬼婆がいだつけと。

「ばさま、ばさま、ここらになら梨実^なつてたどこ知らねが」

と聞いたと。婆は、

「知ってだ」

「どこだ」

「この山のかげの山のかげの、七曲がり上って行くとなつてたそ」

「ほんじゃ、行ってもいで来らんね」

そうしたれば、鬼婆は、

「いいか、太郎、いまに行つて、にさ（お前）どこ呑むぞ」

と言うごんだと、気味わるいにも、まず婆つちやせつかく食いたいがつてゐる
なだから、食かせんべと思つて、かまわず行つたと。そしたらやつぱり、なら梨の
木あつて、そこさ登つて、

「早く持つて行つて食せんべ」

とて、本気でもいんだと。そうしたれば、その鬼婆来たごんだ。

「ほら、野郎、にさどこ呑んでけんぞ」

というもんで来たから、これあおつかないと思つて、木の上まで登つて逃げた

げんども、下から鬼婆、木に登って来て、太郎はツルツと吞まったと。

そして、今度は、太郎が家さ帰って来ないもんだから、次郎は、

「なんで兄、まだ帰って来ない。あんにやオレが今度行ってみる」

と行つたと。そしてそいつもその通りで、鬼婆に聞いてそこさ行つて、もいだば、ツルツと吞まったと。

こんどは三太郎。

「化物にでも会つたかしんねえから、一つ脇差もつて…」

と、行つたれば、また鬼婆いたと。三太郎は七曲り登つて行つて、なら梨の木さ登つてもいでしたら、鬼婆出てきたと。

「この婆アに二人吞まったんだな」

と用心して、木さ上つてもいっだところが、木の上の方に逃げないで、わらわらと降りて来たと。そして脇差抜いたところが、婆ア魂消たと。

「婆ア、オレの兄貴二人吞んだべ」

と言うもんで、脇差つきつけて、せめたもんだ。そうすつど、鬼婆もかなわね

もんだから、

「いや、悪かったげんど、に・き・の・兄・あんにや、みな吞んでしまった」

「ほんじゃら、吞んだの出せ」

そうすつど、鬼婆は「アアア…」と吞んでた、次郎兄を出したと。

「もう一人出せ」

「アアア…」と出したと。

「生かして置かんね」

と、三太郎は鬼婆の首をスプーンともいで、兄二人を助けて、なら梨いっぱい
もいで来て、家のばんちやさ食せたと。

そうしたれば、ばんちや、じきに病氣よくなつたけど。とうびんと。

(上野 高橋照太郎)

なら梨とり（二）

おじいさん一人に、一郎と二郎と三郎と育てらつたと。

ある日のこと、おじいさんが風邪ひいて、

「なら梨食つてみたい」

と言うもんだと。そうすつど、なら梨つて、すごい奥山さでないと、実つていないのだと。一番大きい一郎が、

「おじいさんが、そんがい食いたいごんだら、オレ行つて採つて来て食せつから」とハケゴ持^たつてなら梨とりに行つたんだと。途中まで行つたれば、

「もんどれさつさ、帰れさつさ」

と風が吹いて来たんだと。

「はて、奇態な風も吹くもんだ」

と思つたげんど、ずつと行つたんだと。そうすつど、大きな川原の上つ側で、鬼婆がシラミとりしつたんだと。恐つかなかつたげんど、

「婆っちや、婆っちや、おじいさんが風邪ひいてなら梨食いたいというから、なら梨実なつてたどこ知らねべか」

と聞いたもんだと。

「知つてたども、知つてたども、この山越えて七つ山越えて、沢さ行くじど、大きな木あつて、いっぱい実なつてだ」

と言うのだと。喜んで一郎が山越えて行つたんだと。そうすつど、すばらしいなら梨の木になら梨が実なつていたんだと。木さ登つてもぎ始めたら、

〈ジャランポン、ジャランポン〉

と茶毘だみ来たんだと。

「はて、こげな山奥さ、茶毘など来て、恐つかないもんだ」

と思つていたど。そうすつど、茶毘が段々と近づいて来て、なら梨の木の下さ棺を置いて、みな行つてしまつたんだと。そうすつど、その棺が二つに割わつさけて中から、先程さっきだの鬼婆が出はつて来たんだと。

「一郎、呑むぞ」

一郎は木のシン・ポエまで登って行つたげんども、鬼婆も上つて来て吞つたんだと。

家ではなんぼ待つても来ね。夜になつても来ねもんだから、次の日、二郎が出かけたなだと。やっぱり途中まで行くと、変な風吹いて来て、不思議だと思ひながら、行つたわけだと。そうすつど、また鬼婆がその川原でシラミとりしつたんだと。またそこで聞いて行つてみたらば、なら梨が実つていたんで喜んでもいでいたんだと。そうすつど茶毘来たんだと。そうすつど、棺を木の根っこさ置いて行つたんだと。そして棺が二つに割つさけて鬼婆から吞つたんだと。

家ではなんぼ待つても二郎も来ねごんだと。三郎は、

「誰ももどつて来ない」

と言つて、山刀だの庖丁だの刃物いっばい用心して、次の日に向つたんだと。風もまたそういう風で、川原まで行つたら鬼婆、シラミとりしつたんだと。そこで、

「婆っっちゃ、婆っっちゃ、なら梨の木はどこさあんべ」

と聞いて行つたんだと。そうしたらば、やっぱり実^なつていたんだと。茶毘来たんだと。棺が割^わつさけて出て来た鬼婆が「呑むぞ」と言うたんだと。

「こいつが兄んちやだ・(達)二人も呑んだんだな」

というわけで、刃物で鬼婆さ掛つて、そして鬼婆どて退治して、腹の中さそっくり吞まつた二人を、腹切つて出して、さいた腹さ石を一杯つめてなら梨を三人でもいで来て、おじいさんさ食せておじいさんの風邪いっぺんで治つて、みんな安泰に暮したど。

(宮原 山崎ヨシエ)

二つの「なら梨とり」をとり上げたのは、それぞれストーリーのニュアンスのちがいを
見るからである。前者は一般のストーリーであるが川原で風が「もどれざんざん」とか、
川の流れが「もどれざんざん」などと吹いて来たり、流れたりする部分が消えてしまつて
いること。後者では、川原に鬼婆がいてシラミとりしている点、茶毘と会う点は、前の方
が「桃太郎ばなし」の一部分と、後の方は「法印と狐」の一部分とだぶっているのではな
いかと考えられる。以上のことから消滅した物語、混線した物語りの側と考えることがで

きるのではないだろうか。

11 団子どの

むかしあつたけずまなあ。

じさまとばさまいたけずまな。じさまが庭掃くべと思ったら、団子一つ拾ったと。そしてその団子拾うべと思ったら、ころつと転んで行って、ネズミ孔さ入って行つたどこだと。そうすつど、さてさてと思つて、じさまも後から、

「団子どの、団子どの、どこまでござる」と言つと、

「仙台の深山の洞まで、洞まで」

と、ころころと転んで行つたずも。そうすつどじさまも孔ぼこの中さ入って行つた。そして追かけつけんども、どこまで行つてもその団子さ追付かんねごんだ

も。

ずうつと、よっぽど行つた頃、たいした大きな地藏さま立つてござる。その地藏さまさ、

「地藏さま、地藏さま、ここさ今団子転んで来なかつたべか」

と聞いたところが、

「来たげんどもな、じさま。オレあんまり腹減つたので、その団子食つたごんだ。ほんでお前にええこと教えつから、オレ言うこと聞いて、オレの膝かぶさ上れ」と言わつたと。

「いやいや、地藏さまの膝の上さなど、もったいなくて上らんね」

「差支えないから上れ」

と言うもんだから、その地藏さまの膝の上さ上つたど。そうしたところが、

「肩さ上れ」

「いやいや、膝の上ささえもやつと上つたもの、肩の上さなど、とても上らんね」と言うげんども、

「かまうことないから上れ、上れ」

と地藏さまに言わつで、肩の上さちよこんと、じさま上ったずも。そうしたところか、今度あ、

「頭の上さ上れ」

と言うずも。

「いやいや、頭の上さなど上ったらば、目つぶつでしまふ」

と言うげんども、地藏さまは、

「差支えないから上れ」

と、とうとう頭の上さ上ったずも。そうしたれば、地藏さまの言うには、

「ここさ、晩げになると博奕うち、いっばい来つから、博奕打つてたとき、鶏のまねしろ」

そして、

「一番トリ、二番トリ、三番トリが啼くと夜明けんなだから、三番トリ啼いたとき、銭も金もみなその俣して置き放して逃げて行いんから、その金みなさらつて家

さ持つて行け」

と言わつたと。そして地藏さまの言わつた通りに、じさま守つていたわけだごで。

暗くなつど、いっぱい来た。そっちからこっちからも赤鬼、青鬼、びっこ鬼などもいれば、さまざまな鬼がいっぱい来て、

「さあさ、始めろ、始めろ」

と言うもんで、やつぱり毎晩なもんだから、銭金いっぱい出して博奕はじめた。そして一生懸命になつて博奕打つてるとこさ、刻限見計らつて、

「パタパタ、パタパタ、コケコー」

「あら一番トリだ、ぼやぼやしてっじど、夜明けっから、さ、せっせとせっせと」
銭などゾロゾロとそっちにもこっちにもいっぱい出して、たいした大博奕になつたことだと。そうしている内にまた二番トリ、

「パタパタ、パタパタ、コケコー」

「ほら、二番トリだ。三番トリ啼くと夜明けっからな、早くありだけの銭みな出

せ」

そうして一生懸命になって銭みな出して、ええ博奕になったわけだ。そうしていたところあ、また三番トリになった。それあ三番トリだというわけで、そこさありだけ出した銭かまねで、みな逃げて行つたずま。その後、地蔵さま、

「じさま、じさま、今だぞ。早くその金拾つて、家さ帰れ」

と言わつて、地蔵さまにみなもらつて、大変喜んで、カマスに入れて背負つて来たど。

そしてところが、ばさま一人ばり留守番してで泊りぶつて来ねもんだから、

「なえだ、じさま、今帰つたどこか。何処さ行つてきた、一晚泊つて」

「いやいや、こういうわけだ、ばさま」

「あらら、ほんじゃええがったな。ほんじゃ、オラだ金持だぜはあ」

とて、大変に喜んでいたとこさ、隣のばさま火貰いに来たもんだ。

「お・し・よ・う・し・だ・げ・ん・ど、火の種一つ呉くつてお・く・ら・せ」

と来たので、そのばさまは大変にやさしく、火の種呉れてやつたと。そうすつ

ど、隣のばさまは欲たかりばさまで、そのカマスさ入った錢、さすがに目についた。そして、

「なえだまず、こっちの家さ、ほがえにカマスさ入れる程に錢あんのか」

「ほだ」

「なじよして、こがえに錢もうけたこ」

「オラ家のじさま、こういう訳だった」

と昨日あつたことみな語つて聞かせたと。それれば、その隣のばさま、

「あら、そんがえなことで錢もうけたごんだらオラ家のじさまも寝せておかんね。んじや、そういう風にして団子拵えて、錢もうけらんね」

とて、火貰つて行つたと。そして寝ったじさまのどこを、

「なえだじさま、まだ寝つたことか、隣の家さ火貰いに行つてみたところが、大したもんだ。隣の家なの、錢と金、カマスさ入れて一つあつけぜ」

「なじよしたことだ」

「こういう訳であつたと」

「ほだれば、早く団子拵え」

とて、じさまとばさまあ一生懸命になって団子拵えて、そのネズミ孔に入れてやった。ほだげんどその団子大きいから仲々転んで行かなかつた。棒もって押して行つたれば、地蔵さま、やっぱり立つてござつたけど。ほして、

「地蔵さま、地蔵さま、ここさ団子転んで来ねがつたか」

「転んで来ねがつたな。知らね。オレ見つけねがつたま」

「見つけねぎ、あんめえちやえ、見つけたに相違ない。この地蔵、嘘つかして」
「見つけね」

そうすつど、この地蔵、嘘語り地蔵というもんで、地蔵さまさんざん悪態して、上れとも言わんねに、ちよこんと頭の上さ上つていたど。

そんげなこと知らねから、博奕うち、また来たずも。そして昨夜の通りに博奕打ち始めたど。じさま早く金欲しいもんだから、刻ときでもないのに、鶏啼いたずま。

「なんだ、今夜の鶏早いな」

「ええから、まず一番トリだから大丈夫だ」

そして二番トリ。

「ほら二番トリだ」

という間に三番トリ啼いたわけでも、ほれ。

「こりや大変だ」

というもんで、金も置きっ放しに逃げて行っただげんども、びつこな鬼は足遅いもんだから、遅っだずも。そうすつど、

「ええ、野郎べら、オレに鶏のまねされて、みな錢も金も置いて逃げて行つた。それあみなオレのもんだ」

と言つた。じさまはさらい始めた。そうすつど、びつこの鬼あ聞きつけて、

「なんだ、人のような音したな、ふんふん」

と嗅^かいでみてる、

「やっぱり人間の匂いする、まずみんなもどれもどれ」

と言うもんだから、

「何かあつたか」

「いや、人いた、此処さ」

そして探^{たね}してみれば、じさまが恐^{おそ}かながつて、その錢^{ぜに}さの^だば^つて（這^こい
つくばつて）ふるふるふるえていたけど。

「このじさまだな、昨夜^{ゆんべな}も金^{かね}とつてつて、今日も金^{かね}とつどこだつたな、おえ^えない
盗人^{どろ}じさまだ、こげなじさま縛^{ゆんべな}れ」

「いや、オレでない、昨夜^{ゆんべな}盗^どつて行^いつたな隣^{とな}のじさまだ」

と言うげんども、博奕^{ばく}打^だちは何^{なん}というても何も聞^きかねで、隣^{とな}のじさまのどこを
ぎりぎり^{ぎり}と縄^{なわ}で縛^{ゆんべな}つて、川^{かわ}の中^{なか}さ^{ぼん}とぶつ込^こんでや^やつたと。そうすつどじさま
も困^{こま}つて、そつちやこつちや流^{なが}れてぶつつかるもんだから、とうとう柳^{やなぎ}の切株^{きしず}ひつ
つかまえて、そこから上^あつて、だらだらという恰^{なり}好^りして、ふるえふるえ、泣^なき泣^り
き家^{いへ}さ帰^{かえ}つて行^いつた^なずも。

家^{いへ}に待^{まち}つてたばさま、

「な^なえ^えだ^だて、オラ^{おら}家^{いへ}のじさま遅^{おそ}いもんだ」

と見^みつた^なずも。じさま泣^なき泣^りき、だらだらという^ななり^りして家^{いへ}さ帰^{かえ}つて来^きた^なつて

ど。

「なえだ」

「なえだもかえだもない、オレばりひどい目に会った、うんうんうん」

と泣くごんだも。そして「なにしたごんだ」と聞くと、「こういう訳だ」と言う
たど。

「んだから、そがえに急がねでいると、ええなよ。早く銭もらいたいもんだから、
いそいだから、そんがえな目に会ったのよ」

人のまねざあ、んだからするもんでないど。とうびんと。

（大橋 川井遠江）

置賜の代表的な昔話が、こんなニュアンスのある話し方で語られるのは興味がある。赤
湯町で聞いた昔話の中で、最も原型に近い昔話の一つである。「団子浄土」と一般に言わ
れるが「団子どの」といった方が通りのよい話である。

12 篩ふるい 借かり り

むかしあつたけずまなあ。

じさま、庭掃きしてで、豆二粒拾ったと。そしてその豆半分は種子、半分は黄粉きなこと分けて、そいつをカラカラと、茶焙ほうじで豆炒いったと。そして黄粉になったげんど、それをふるう篩ふるいなかったと。篩借りに行つたれば、

「篩借しておくやい」

「子どもいっぱいいるもんだから、喧嘩してみなぼつこして（こわして）ない」と言わつたずも。

そんでその隣さ行つて借りんべと思つたが、そこにもない。どこさ行つてもないもんだから、

「ほんじゃ、仕方ないから、じさま禪のはしでもさんなねつだな」

と、禪のはじを出してふるつたど。その時、じさま、ブツと屁たつたずも。そしたらその黄粉みな向いの山さ飛んで行つたずも。そうすつど向いの山さいた

キジは黄粉見つけて、

へケンケン、ゴドゴド

向いの山の松の木さ

うまいもの くつついた

ケンケン、ゴドゴド

うまいこと ゴドゴド

とみな黄粉なめてしまったど。とうびんと。

(大橋 川井遠江)

昔話にはそれを聞く子どもの年令に応じた唄が入るものであった。幼年期の昔話の一つがこの「篩借り」で、笑話の形式であるが、笑話であることを知らずに聞いたものだという宮原の山崎みやのさんの話から想像して、三、四才の頃の昔話と考えられる。

13 狐 退 治

むかし、深沼街道（現高島町）に萱野がいっぱいあつた頃だつた。深沼から大橋さ出る街道に、うんと狐がいて、狐に時々化かされて難渋したと。そのために、お寺さまさ寄つて村中の人、なじよかして狐退治する相談したもんだと。

そんなとき、お寺さまさかしこい小僧いて、

「そのことなら、オレにまかせろ」

と言うのだと。そして小僧は、

「誰かここに集まつた人のうちに、丈夫な馬持てた人、一匹貸してお・く・や・い」

と言うんだと。何すつかと思つたら、次の日、小僧が馬率ひいて深沼街道さ行つたんだと。そして大概萱立たがい（萱を切つて苞つとにして立てて乾しておく）の側さ行つて、

「和尚おっさま、和尚さま」

と大きい声立てて呼ばつたんだと。そしてたれば狐あ萱立ちのかげの方にいたつ

け、――狐ぎ、化けるとときカランカランとひっくり返るもんだと――二三度ひっくり返ったら、赤い衣着た和尚さまになったんだと。そして出て来たから、小僧は、「和尚さま、あんまり遅いから迎えに来たのよ」

と言うたんだと。

「よく来たな、小僧」

「そんじや、馬率いて来たから、和尚さま、ひどくいやんべから馬さのつておくやい」

と馬にのせたんだと。そして綱もつて行つたので、ぎりぎり和尚さまどこを結ゆわえつけたんだと。

そしてそこらまで来たば、

「小僧、落ちねから、そんがえにぎつと結わえんな」

「いや、和尚さま、道わるいから、落ちるとわるいから……」

と、また途中まで来ると、狐あ逃げたいもんだから、じたばたいうげんど、綱で逃げらんねもんだから、とうとう寺までつれてこらつたんだと。そしてお寺さ

まで、座敷部屋さ入れらっで、村の若衆からいじめらっただんど。叩かれて、

「これから決して人を化かしたりしない」

ということの約束させらっで、叩かれたときにびっこになつた足ひきずりひきずり逃げて行つたと。そして「びっこ稲荷」になつたんだと。

(大橋 三瓶ちの)

この昔話は「和尚と小僧」の話から派生したものと考えられ、深沼街道に狐が多いということから、地域の話と結びついたものであらう。同様の話としては「狐に化かされた話」として後述の「化かされたよう平」(金沢)があるが、話としてはこの方がすぐれている。

14 魚いさば 売 り

むかしあつたけずまなあ。

背負い子の魚いさば売り来たところ、道に迷つて、玉坂新道の方さ行つてしまったと。そうしたところが、何処まで行つても家もないもんだし、

「こりや、暗くなつてしまつたんだし、困つたもんだ」

なんて居たところが、そこにポカリポカリと灯が見えて、家があつたと。それからそこさ、何とも仕様ないんだし、まず、

「泊めておくやい」

と言つたと。したれば年寄りばさま、囲炉裡さ火焚いて背中あぶりしつたと。

「何にもないげんど、泊まるばりだらええから、泊まれ」

仕方ないんだし、魚屋泊まつたと。そして唯も泊つていらんねんだし、背負つて来た魚をばさまさやつたと。そしたら、ばさまは化物の本性あらわして、生で乾魚、ミイミイミイと皆食つたごんだと。気味悪われごんだとて、ばさまが食つて

る間に、魚屋も天井さ上って、ばさま一生懸命うまいと食ってんのを見たと。その次は何するこんだべと思つて見つたど。ばさまは魚屋のもつて来た魚、もつとないかと、一背負いみな食つて、喉乾いたから、ドブロクでも呑むべと、ドブロク温めて呑んで、

「はてな、今夜は寒いから石の唐戸さ入って寝たらええんだか、木の唐戸さ入って寝たらええんだか、何処さ入って寝たらええんだか」

と、一人言たつていたんだと。魚屋は天井さ上って、ばさまの言うのを聞いて、だんだと。

「今日は冷えっから、木の唐戸さ入って寝んべ」

と言つて、ばさまは木の唐戸さ入って寝たと。ほんじゃ、しめたと思つて、ばさま寝たところ、魚屋上から降りて来て、まず錠かけたど。

「何すんだ（するんだ）こりゃ」

とばさま、ええ調子で寝つたど。魚屋はお湯鍋さ、どんどんお湯わかして、錐で唐戸の蓋さキリキリキリと孔あけた。ばさまは中で、

「キイキイと言うあ、キリキリ虫でも来たか、こりや」

魚屋は蓋の上側さ孔あけて、煮たったお湯をどんどんと入っでやった。そうしたら、ばさま魂消て、

「助けて呉ろ、助けて呉ろ、悪いことしないから」

と言うげんども、魚屋は、

「いや、貴様のようなもの生かして置くと、ろくなことしないから、殺してしま
う」

と、どんどん、かまわず煮湯かけて、化物は殺さつたと。とうびんと。

（上野 高橋照太郎）

一般には「鯖売り」と言われる話で、化物がドブロクを吞むときに、天井の魚屋が藁みこで吞んでしまったり、餅を焼いて居眠りする化物を見て、代わりに棒で餅を刺して天井で食ってしまう部分が欠けてしまっているが、よく整った話となっている。

15 角力と化物

むかし、村の鎮守さまさ化物巢くつてだけと。そしてその化物が毎晩毎晩、夜中になつど出てきて、子どもをさらつて行くつてな。さらつて行くにも番があるわけだま。今日はまず上の端かみから、次の晩はその隣の家、その次はその隣の家と段々さらわつて、村に子供いなくなつたつてよ。その化物を何とかして退治したいもんだと思つてゐるげんども、仲々退治する人もいないんだし、困つていたつくと。

そしてゐるとこさ、ある日の晩方になつたとき角力とりが二人で来たつてよ。

「区長の家どこだ」

と聞くと、

「そこだ」

と言うもんで、角力とり二人ア行つたところが、晩方なもんだからみな忙がしくて、そこのおばあさんが、

「おとつつあま、いま畑き働きに行つてていない」

「オ・レ・だ・は角力とりで、今夜一晩泊めてもらいたいと思つて来たところだ」
と言うたどこ、

「おとつつあま呼ばて来て、聞く他ない」

と年寄りあ畑き走つて行つたとこだつけ。そして呼ばて来て話なつたどこだつけと。そしたれば、

「こ・う・い・うわけで、この村の鎮守さまさ化物巢くつていんな、その化物さえも退治して呉つこんだら、泊め申すどこでない」

と、こ・う・い・う話だな。

「化物退治だら、オ・ラ・だ・太好きだ」

そして、

「オレは磐石弥次郎というもんだ、こっちは岩張巖藏というもんだ」

区長は化物退治大好きだというもんで、喜んで泊めた。まず寄つて、お湯（風呂）さ入らせてもらつて、お酒から御飯から御馳走になつて、

「化物出るのは、夜中の十二時頃だから、それまで休んだ方がええ」

というもんだから、

「なじよな時間に出てくる？」

と言うたれば、

「夜中になつど、いかなる晩でも、ごうーと風吹いて来る。その風吹いて来たと
思うと、パラパラパラと雨降つてきて、每晚その通りで、その時間に化物が出て
来て、子供さらつて行くのだ」

そう聞かせたと。夜中になるのばかり待つてさまざま化物退治の荷縄だとか、
いろいろなもの準備して待つてたとこだ。その時間になつたれば風吹いて来たん
だと。そして雨がパラパラ降つて来たと。そしてところが、何かドーンという音
したどこだと。ソラッーと言うもんで行つてみたれば、化物は鎮守さまのエノミ
の木のところさ立つてたどこだと。そうすつど、まず、

「この化物、子どもら、さらつて来て悪い奴だ」

と言うもんで、ぎりぎりとは物を縛つてしまつたどこだ。化物は角力二人かが

りで掛らっただもんだから、負けてしまったと。縛らっただがらみ、そいつズルズルと引張って裏の松の木さ繋いだどこだと。そして、とにかく化物退治したから安泰だというわけで、帰って来て明日の朝までぐっすり眠たと。

化物は松の木に繋がれて苦しがつて「ウーン、ウーン」とうなったどこだと。その声の大きいこと、すばらしい声だったと。

「化物の畜生、オラだに縛らつて、苦しがつて声立ててうなっていた」

「明日の朝げまでだら、大抵死んでいんべから、ゆっくり寝ろ」

というもんで、寝たわけだ。そして次の朝に暗いうち起きて行ってみたれば、化物いないと。なんだべと思つたら、その松の木もないと。松の木がらみ化物いなくなつたわけだ。そしたれば、松の木を引くら返して、ずうーと引ずつた跡は溝ほりこになつてたと。その跡頼たよつて行つて見たれば、その松の木背負つたまま、エノミの木のごこさ、ちゃんと立っていたと。

「この畜生、太つとい畜生だ」

とて、斧まさかり、持たがつてまた叩くべと思つたら、その化物、

「ちよつと待つて呉くろ」

「なんだ」と言うたならば、

「実は、オレは化物でない」

「化物でないごん・だ・何だ」

そしたらここの鎮守さまだったと。

「鎮守さまだら、なして子どもら毎日さらって来て食うごんだ」

「食ったのでない」

「なじよした」

そしたら、縁の下さ大きく穴掘って、そこさ子どもら皆入れて、生いかしておいっ
だけと。

「どういうために、そんなことした？」

「この通り見てける、ここの村ではずっと前まで毎年お祭りして、オレどこを大切に
してたげど、今ではこの通りお祭り一つして呉くんねし、草はぼうぼう、この
仕末だから、オレはこらえ兼ねて、そして化物になって、子どもをつれて来て、

ここさ仕舞つてたなだ。一人も死んだりなんかしないし、丈夫でいたから」

と言わつて、んだらばと縁の下さくぐつて行つて蓋を開けてみたらば、いやいっぱい居たも居たも。それから角力も、

「そういうわけならば、村にも悪いことあんなだから、よくこういうことないよに教えて、お祭りもしてもらうし、邸も綺麗にしてもらうし、これから化物なて出来ないように」

と約束して家さ歸つて来て、その通り話したところ、村でも悪かつたと言うて、それから立派なお祭りして、その化物も出なくなつたし、村も繁盛したと。

（大橋 川井遠江）

子育て地蔵の話は各地に見られるが、この話はその変形と考えてよい。伝説としては角力の登場が異色である。昔語りの「化物話」と同一視は出来ないが、ストーリーが角力によつて組立てられている点は注目してよいだろう。

16 ねぼけ先生 — 寝太郎話 —

寝てばかりいて、隣で正月の餅搗きしているのに、自分は餅搗かんねがったと。

ねぼけ先生は醬油持^たつて行つて、隣の天井に登つて忍んでいて、餅搗きした
臼の上さ、ネズミのまねして、醬油、パタパタ落してやつたと。

「ネズミの小便で、この餅食わんねから、ほんじゃ、隣のねぼけぐらいならば、
餅も搗かんねで、餅も食わんねべから、持つて行つて呉れんべ」

と、呉れて来たと。

（大橋 川井弥右衛門）

寝太郎話を「ねぼけ先生」と言うのは、この地方独特の言い方と思われる。正月の餅を
猫に紅をつけて餅の上に転がらせるという話で白鷹町で採集されているが、それと比較す
ると、ニュアンスにとぼしい気がする。

17 左平ばなし

(1) 豆腐のスダレ

左平がある時来て、

「いや、今日、米沢城下さ行つたところが、豆腐で編んだスダレ見て来た」と言うたど。

「何つかしている。スダレを豆腐で編んだりされんめちやい」

「ほだたて、オレあ見て来たぜ」

「ほんじゃ、行ってみろ」

と言うわけで、わざわざ米沢の城下まで行つたずま。そしてところ、普通のスダレぶら下つていたずま。

「やっぱり、縄で編んだスダレだどれ」

「ひと封、ふた封…」

と数えて、

「やっぱり、十封とおふうで編んだのだどれ」

と左平が言うたど。

（大橋 川井弥右衛門）

（2）死んだ馬が草食う

左平がまたある日、

「いや、とんだもの見てきた。今日は。死んだ馬が草食つてだな見て来た」

「なんぼ馬だつて、死んだ馬が草食う話なんて、あつたもんでない」

と言ったところが、

「実際、あそこで食つてだから行ってみろ」

と、行つてみたというごんだ。そしたら、死んで、馬が腐っていたもんだから、

ふんぷんすばらしい匂いしていたんだと。

「ほうれ、死んだ馬、草食ってだべ」

と、左平にだまされたと。

(大橋 川井弥右衛門)

(3) 酒の籠抜け

むかし、上杉さま領の頃、深沼・屋代(現高畠町)さ行くと、御領だったから、高畠ではうんとゆるやかな御年貢だったと。米沢では少し餓死(飢饉)になつど、酒造んな、着るもの着んなと、うんと厳しいものであつたと。

んだから、深沼の番所では、皆改めが厳しかつたど。左平はこっちで酒造らねとき、御領ではどどん造っているもんだから、御領さ行つて、酒をもつて来るずも。酒樽を持って来つど、とがめられつから、左平は、

「一つ、あの役人野郎べらさ、小便吞ませて呉れんべ」

とて、酒樽さ小便を詰めて持ってきた。そうすつど、

「その樽、なえだ」

「小便だ」

「この野郎、嘘つかして、小便なんて樽さつめて背負つて歩くめえちやえ、酒だべ」

「ほんなえ（そうでない）小便だ」

役人が取つかえして、吞んでみたば、やっぱり小便だった。

「この野郎、太い野郎だ」

「ほだて、小便だて言うに聞かねで吞んだんだもの」

そうすつど、次から酒を詰めて背負つて来るげんども、

「あの野郎、また小便吞ませられつど悪いから吞むな」

と、酒を持って来ても通したもんだと。

（上野 高橋照太郎）

(4) ローソクを持ち出した話

米沢藩では、ローソクはやたらに他領さ出さねことにしていたと。

左平はお番所ところを通るとき、大きいお茶箱さ、こげな小つちやなローソクの破片かけら一つ入って来たずま。

「これ左平、何背負って来た」

「ローソクだ」

「ローソクは持つて行つては駄目だ。開けてみる」

と言われて、開けてみたところ、箱の中に、こげな小つちやなローソクの破片かけら一つしか入っていなかったと。

「はつけなもの（そんなつまらぬもの）、差支えないから早く持つて行け」
と言われた。その次は、ぎつしりいっぱい持つて来て、

「ローソク持つて来たたが」

と言うと、

「ああ、左平ローソクだら、ええ」

と言うた。それから左平はローソクをかまわず持つて行かれた。かつたど。

(大橋 川井弥右衛門)

(5) 旦那に行きたくない金

あるとき、魚屋いさやさ左平が稼いぎに行つたと。そして給金きんもらうときになつたれば、その魚屋いさやの旦那が、金出して、

「錢ぜに、錢、左平のどこさ行きたいか、行きたくないか。行きたくない!?! ほんじゃ、この次だごで」

と言つて、馬鹿にされて錢もらわんねがつたと。

「ほんじゃ、仕様ないごでな」

ともどつて来たずま。

それから時過ぎてから、その魚屋いさばさ左平が行つて、

「今日は御祝儀の特別の注文の魚だほで、オレの言うように切つて呉ろけ」
ということ、とんでもない形のものばり切らせたもんだと。そして、

「なんぼになんべ」

と左平から言われて、魚屋いさばの旦那、勘定して、

「この勘定はこうだ」

と言うと、左平は財布を出して、

「銭ぜに、銭、旦那どこさ行きたいか、行きたくないか、なに!!行きたくない!?ほんじゃこの次かたきだごではあ」

左平に敵かたきとらつじやずま。

(大橋 川井弥右衛門)

(6) 煮たった湯

左平が、

「がらがらと煮たった湯、呑みよう知ってる」
と言うので、

「なじよして呑むのだ」

「こげなもの、何でもない。呑まれるもんだ」

「んじゃ、教えろ。その呑む秘伝教えろ」

「じゃ、貴様、酒一升買え、教えっから」

相手は手品使いにでもなれるもんだと思つて、酒一升買つて左平さ吞ませたと。

「さあ、なじよして呑むこんだ」

「なあに、喉など焼けたば焼けるほど、かまわず呑まんなねごで」

と、ただ酒一升吞まつてしまつたど。

(上野 高橋照太郎)

(7) 植木売り

左平が松の木の恰好のええのを切ってきて、土さ植えて鉢たがを持って行つたと。
旦那衆の家さ行つて、

「植木持もした」

「なんぼだ」

「いや、なあに、なんぼなて、旦那のええほどでええごで、俺あ唯もつて来たんだもの、値なしでええごてはあ」

そして、

「値なしで言わつだつて、せつかく掘つて来たんだから…」

と、金を払つたずも。

ところが左平のもつて来た植木は土にさしたばかりだから、根っ子ないごんだ。

旦那のところに左平が次に来たときに、

「なえだ、まず左平、貴様、せんど、ころつと欺して、根っ子のない松の木持つ

て来たどれ」

「ほだから、旦那、根なしでええと言うたどれ」
と言うたど。

(上野 高橋照太郎)

(8) 桑こき

左平が来たと。

「旦那、桑持もした。買ってお・く・や・い」

「なんぼだ。桑」

「なんぼでもええごで、なあに、ええようにええごで。オレあ桑こき賃さえもら
うとええなだ」

と旦那に左平が言うたど。桑のこき賃なんて、そ・ん・が・え・安・く・さ・ん・ね・し、当たり

前に買ってやったと。そしたれば、次の日見たれば、自分の家の畠の桑こいていたったと。

「なえだ、オレの家の桑こいて持って来たのんねが」

「んだから、桑のこき賃さえもらえええと言うたどれ」と言い逃がれたんだと。

（上野 高橋照太郎）

左平ばなしは、上野の稲葉平次という人の奇行の話だという高橋照太郎さんの教えがあったが、「とんち話」である。「この辺では彦一でなくて左平と言うんだ」という川井弥右衛門さんの話もあり、どちらにせよ、笑話として取扱ってよいものであろう。面白い話であるが、彦一とんち話にくらべると、昔話としてのふくらみがない。しかし八話もあることがわかったのは大きい発見と言えるだろう。年代的に言って古いものではないことが、内容から理解できる。

18 南の山の馬鹿聲

オカタの家さ招よばっで行つて、団子汁して食せらつたと。そしたれば団子うまいから家さ来て、オレも拵もえて食せてもらうかと思つて、忘れつどわるいから、

「ダンゴ、ダンゴ、ダンゴ」

と語つて来たれば、大きい堀あつたど。そこを、

「どっこいしょ」

と、はねたら、

「どっこいしょ、どっこいしょ、どっこいしょ」

と言つて家さ来るより早く、

「オツカア、どっこいしょ拵もえて呉ろ」

と言つたと。

(大橋 三瓶ちの)

「南の山の馬鹿聲」という言葉がよく使われるが、話は省略されてしまったものが唯一

見つかった。もつといろいろあると思われるが…。

19 かわうそと狐（一）

かわうそは雑魚とり好きで、上手なもんだから狐もまねしてとりたくて、
「かわうそ殿、かわうそ殿、なじよしてその雑魚そがえにいっぱいとれる」
と聞いたど。そしたれば、

「寒じる晩げ、堀さ行つて、氷掘^{すが}つてその中さ尻尾をちよろつと入^いつておくと、
重たくて引上げらんね程雑魚食つく」

とだと。そのまねやったみたど。ところが雑魚など一匹も喰付かねで、ガンガ
ンと凍みて、そのうち夜明けて来たというわけよ。そうすつど、人に見付けらつ
で、

「あそこに狐いた」

なんて、やんやんと言われつじと、大変だと思って、なんぼ雑魚ついたと思って、尻尾を引張ってみたげんど、仲々抜けて来ない。ちいとばりの小っちゃい雑魚あ落ちてもええからというわけで、

「少々な小雑魚落ちでもええ、えんさらさえんさらさ」

と掛声かけて狐は引張っていたつてよ。んだげんどもガンガンだから、尻尾抜けてしまったど、スポーンと。そうすつど痛くて痛くて、血はだらだら出たべし、山さ、コンコンコンコンと泣きなき登って行つたと。そしたら、

「狐殿、狐殿、そがえに、なにして泣きやる」

と猿が来て言うたと。そしたらば、

「こういう訳で、ゆんべ雑魚とりに、かわうそから聞いてその通りにしたれば、雑魚など一匹もとれないで、尻尾抜けたごんだ」

「いやいや、それは可哀そうだ。オレが薬作^けって付けて呉^けつから…」

と、南蛮と味噌を出させて、播鉢ですつて、べったり貼つてくれたど。それこそビリビリと痛かつたと。とうびんと。

かわうそと狐(二)

ある山の中に、かわうそと狐が友達で暮らしていたと。あるとき、狐がかわうその家さ遊びに行つたど。

「よく来て呉くつじゃ」

というもんで、大変よろこんで、狐の大好きな雑魚煮なだな一杯出して御馳走したと。狐あ喜んで、

「いやうまかつた、うまかつた。こがえに今頃の雑魚なじよして獲とつた」と言うたら、

「じ・よ・う・さ・ね(やさしい)もんだ、そんげなこと」

「ほんじゃ、オレにも獲るよう教えて呉けねか」

「教える」

と大変受けええんだな。

「寒ずる晩に、堤さ行つて、尻尾を堤さ入れておくこんだ。尻尾さ雑魚掛つてな、大変とれる」

という話で、

「誰だつて獲れっから入っでおくこんだ」

ええこと聞いたつうもんで、狐は、ある晩、大変寒じるこんだど。今夜逃がしてらんね、と思つて、どんどん堤さ行つて尻尾を入っでだど。尻尾入っでなんぼ掛つたと思つて、明日の朝あしたげまでなど、気あもめて、とつても入っでおかんね。そつと引張つてみっど、まだ軽いずも。

「まだ掛んねな」

夜中になつてびんびん寒じて来た。そうすつど、こんどは尻尾凍みついたわけだ。それとも知らね欲たかり狐、雑魚食いたいばりで、そつと引いて、

「こんどは余程掛つたな」

といううちに、寒くてきむくて、耐え切んねくなつたつてよ。ほんでも我慢して朝げになるまで入つてだもんだも。そうすつど重たくて引上げらんねくなつた。「小さな小雑魚は落ちるともよ、大きな雑魚は離んな、エッサツサー、エッサツサー」

引張つて行く気でも、とれねなだな、決して。そのうち堅雪になつたもんだから、子供らは堅雪渡りに行つたら見つけたも。ちよろからいう気かず野郎つ子、「ほら何かあそこにいた。何だべ、狐だ」

「何しつたのや、あの畜生、動けねでいたから、歩いてみる」というもんで、わらわら行つた。狐あ気いもめるもんだから、

「大きい雑魚も小っちゃい雑魚も離れる」

と言うても、決して抜けてこないもんだも。そこき子供ら、もつて行つた棒でコンコンコン叩いて殺してしまつたと。んだから人のまねぎするもんでないけと。とうびんと。

20 猿 と

蛙 びつき

猿と蛙びつきいたつたと。正月に餅食くたくなつて、蛙は井戸の中さ入つて赤ン坊の泣きまねして、そのすきに猿は臼がらみ餅とつて背負つて行つたと。蛙はやつと、そつちやぶつつけ、こつちやぶつつけ、石の中から上つて山さ行つたれば、猿あ餅、自分ばり食いたくて、

「ここから臼転がしてやつから、誰でも早く捉えたものが、皆食うこと」
の約束したごんだと。そうすつど、一二三、ごろごろと、臼さたぐついて、猿あぐあぐあぐあへ行つたずま。蛙ばり後さ残つて、

「オレあどうせ食んねから」

と思つて、あきらめて後からペタリペタリと跳ねながら行つたれば、猿の畜生は欲にばり目くらんで、餅あ途中抜けたの知らねで、臼さたぐついて行つたごんだと。蛙は、

「ここさ皆落ちつた。馬鹿畜生ほに、ここさ落ちたも知らねで、空白さたぐつい

て行つた。オレあ一人っ子でみな食われる」

となめてみたが、皆食われるもんでもないし、木の葉っぱいっぱいかぶせて、一生食つたと。

(大橋 川井遠江)

21 馬と納豆

むかし、ある村に、馬を大切にしている馬子がおりました。夏の暑い日には、馬のカイバに困るので、馬子は豆を煮て藁に包み、それを馬の背につけて、荷物運びをしておりました。あまり暑いので、木影に休んで馬にモノを食べさせようとして、煮た豆のカイバを降して藁を開いてみると、豆は腐れたようにネバネバした糸が沢山出ていました。

馬子は手についた豆をなめて取ろうとすると、とても香りがよいので、食べて

みると、すばらしい味でした。馬子は馬に食わせることも忘れて、

「これはなんとうまいこと」

と、すっかり食べてしまいました。そこで家に帰ってから、また作って村人に御馳走しましたが、こんなうまいものに、名前がないので、「なんと美味なものだ」ということから、『納豆』とつけたとき。

(金沢 新関光造)

22 神様と大根

昔な、大国様という神様がおりました。ある日意地悪な神様がなんとかして大国様を殺す方法はないだろうか、と言いつくと、

「大国は餅が好きだから、餅で殺してやろう」

と相談が決して、餅を搗き始めました。そして神様たちは大国様を呼びに行き

ました。

「大国様、大国様、私の家で餅を搗きましたから、食べに来て下さい」

「はいはい、喜んで参ります」

と言つて、殺されるとも知らずに、大国様は後について行きました。神様達は、

「大国様、これもうまいよ」「これも上らっしゃい」「これもうまいよ」

とすすめたので、

「それでは遠慮なく頂きます」

と、もぐもぐ食べてから、大国様は、

「腹がハジケル程御馳走になった」

と言つて、サヨナラをして家に帰ることになりました。途中で大国様は急に腹が痛くなりました。

「これは困つた、そうだ餅を食べたとき、消化するものを食べなかったからだな」

そして「あーあー、苦しい」と困っていると、道の傍で一人の女が大根を洗つておりました。それを見た大国様は、

「娘さん、その大根を譲ってくださいらぬか」

というと、

「駄目です。この大根は勘定してあるのだから」

とことわられました。

「それなら半分でもよいが」

と頼むと、「そんなら、この股大根の半分をあげます」と言われたので、「よい、半分でもよい」と受取るが早いのか、ガリガリ生大根をかじって食べたところ、あんなに痛いお腹もおさまりました。大国様は、

「ああ、助かった。この大根がなかったら、命をなくすところだった」

と喜んだそうです。それで今でも「耳あけ」のときは大国様の喜ぶ股大根を供えて、機嫌をとるのだそうです。

（金沢 新関光造）

12月9日は大黒の耳あけで、それにちなむ昔話であるが、地方によっては弘法様（米沢市上郷）であつたりする。股大根は大黒のオカタという。

23 天邪鬼蛙 あまのじゃく

むかし、あるところに一匹の蛙がいました。何でも反対するので、天邪鬼といわれておりました。ある日、隣村のおじいさんから、

「田んぼの草とりに、誰かよこしてくれ」

と便りがあつたので、お母さんは雨蛙に、

「行つて手伝つてくれ」

と言いつけました。「ハイヨ」と返事だけ立派にして、雨蛙は隣村に行かず、反対の方へ行つてにつこり笑つて、

「草取りなんて真平だ。それよりも都に行つて、花火でも見てくるでしょう」

と言つて歩きました。都へ行つて雨蛙は楽しく遊んでいました。幾日かたつて、田舎へ歸つて来ました。雨蛙の天邪鬼ぶりは一層ひどくなりました。「塩を買つてこい」と言うと、南蛮を買つて来たり、「魚買つてこい」と言うと豆腐を買つて来るといふ仕末でした。

そのうち、お母さんは重い病気になり、いよいよ死ぬ時がやって来ました。お母さんは自分の墓場を決めておきたいと思つて、雨蛙に、

「私が死んだら、川端にお墓を建てておくれ」

と、わざと悪い場所を言つて死んでしまいました。天邪鬼の雨蛙のことだから、こういえばきつとよい場所にお墓を建ててくれるにちがいないと思つたからです。ところが雨蛙はお母さんに死なれて初めて親の有難さが判り、

「私はいつでも親に反対ばかりして来た、本当に申分けない、せめてお母さんの最後の言葉だけは、いいつけ通りにします」

と言つて、正直に川の端にお墓を作りました。そのため、雨が降るたびに川の水があふれて、お墓が流れそうになるので、雨蛙はそれが心配で、今でも雨が降りそうになると、雨蛙が鳴くわけです。

（金沢 新関光造）

この昔話は一般にデデッポッポの話になっているが、雨蛙の昔話は珍らしいものである。「デデッポッポ、カカあ流れる」と唄が入るのが普通であるが、雨蛙の場合にはこれが入

らないため、教訓ばなしに近くなってしまっている。

24 化かされたよう平

やっぱり昔のことです。町に買物に行つて来た馬喰のよう平さんが、夕方暗くなつて帰つて来ました。暗い山道にさしかかると、女房が迎えに来ていました。そして女房は今日は気がきくなあと思っていました。

「よつぽどくたびっちゃべえ、風呂わかつて待つていだから」
と言つて、急いで帰りました。よう平さんは喜んで、

「熱い、熱い、いい風呂だ」

といつてゐる内に、飲んで来た酒もさめて、よく見たら、風呂はダラ桶に入つていました。熱い熱いと言つたのは、その傍に蜂がよう平さんをさしていたからです。

もちろん買って来た魚はありませんでした。その女房はその山に住む、人を化かす悪い狐だったそうです。

（金沢 新関光造）

世間話から生れた昔話の一つと思われる。昔話というより、世間話であることから、よ
う平というのは実在の人物を模したものであろうが、「熱い」のは蜂にさされていたとい
う話は面白い。

25 三枚のお札

むかし、あるところに大きな寺があつたそうだ。そこに非常に利発な小僧があつ
たと。あまり利発すぎて、

「田舎の寺では修行できない、旅さ出て修行したいから、暇ひまを呉くつでけろ」
と和尚さまさ願い出たと。和尚さまはなんぼ利発でも、子どもなんだから、

「お前なんか、まだまだ早い。もう少し寺で修行して、それから旅さ出て修行しろ」

と言うたと。んだげんど自分が思い立ったことはやっぱりやりたくて、和尚さまの言うことも、ふりむぎつて旅に出ることになったと。

旅の始めの日、行けども行けども野原だったと。その真中で日が暮れてしまったと。暗くなつたにつけても、人家さ辿り着きたいと急いでいた。ところが向うに灯が見えた。そこを尋ねたところが一人の老婆が出てきた。

「旅の小坊主だげんども、途中で日が暮れて、難儀してるもんだから、今夜一晩泊めてけろ」

「むしゃくしゃしてるとこだけども、お困りのようならば、あまりええどこでないからだげんど、泊って行け」

というわけで、その家さ上ったと。小坊主は心細くなって、旅に出つどき、和尚さまにあずけられた青い紙と白い紙と赤い紙と、三つの紙を思い出したと。危いとき白い紙を投げつど、砂山出るし、赤い紙投げつど火になるし、青い紙投げ

れば水になる。と教えらつていたのであつたと。そして炉端に寝たと。夜中頃、ふと目を覚ましてみると、その老婆は鬼になつて、

「腹減つていたなだから、お前どこ、とつて食うべ、ええどこさ、お前が来た」というわけだ。小坊主は、

「鬼婆だから食れんのも仕方ない、んだげんど、オレの腹の中には汚ないものたまっている。廁かわやさ行つて来るから、その内待つててける」

「汚ないもの溜たまつていてはうまくもないべから、汚ないもの払つてこい、ただし糸縄つけてやる」

と縄つきになつて廁かわやさ行つたところが、廁かわやさ、ベロベロの神がいた。これは何でも聞くこと教えてくれる神様だつたと。小坊主は、

「ベロベロ、今、鬼婆が『まだか』と聞くから、『まだまだ』と云うてける」と言つて、ベロベロを欺したと。

こつちは鬼婆。

「小僧、まだか」と言つと、ベロベロは「まだだ」と言ふ。そのうち足の糸縄解

いて逃げたと。あんまり「まーだまだ」と言うので、鬼婆が廁を見たところが、廁の中さベロベロがいて、「まーだまだ」と言うこと解つて、小僧を追かけた。鬼婆と小僧の足では違うから、たちまち追付かれてしまった。初め小僧は白い紙投げた。そうすつど砂山が出た。その砂山を登んべとして、崩れ、登んべとして崩れして、ようやく登り越して、また追付かれそうになつたと。そこで青い紙投げた。目の前さ、すばらしく大っきな川が出来た。またその川をじゃぶじゃぶこいで、また追かけてきた。

その頃、夜もほのぼのと明けて来た。陽が出つど、鬼もすくんでしまうのだと。んだもんだから一生懸命追つかけた。そうすつど、最後の切札の赤い紙を投げたところが、目の前さ火が出来た。ようやく小僧は寺の門さ辿りついて、門の陰さ隠つた。鬼婆も門まで来たが、寺に入らんねがった。そこで門の陰さ隠つた小僧の片耳とつて食つたきりだった。その物音したもんだから、和尚さま出てきて、鉄杖で、

「ここはお前の来るところでない」

と、鬼婆を叩いたところ、鬼はちりぢりと溶けてしまったと。

小僧はそれから、その寺でみっちり修行して、立派な和尚になったと。

（桐塚 佐藤宇之助）

三枚のお札の昔話は、大抵五月節句の菖蒲の話と結びついて語られるが、この話はそうではなく、またお札も白い、青い、赤いお札となっていて、ちよつとニュアンスが異なる。「ベロベロの神様」とは幼児の遊びの一つとしてもあったということは興味がある。

26 猫の恩返し

むかしあつたけずまな。

米沢在の南原というところさ、常慶寺という寺があつたそうだ。その坊さんが、ある日小僧と檀家さ行つた帰りに、犬に追われた一匹の小猫を助けた。その小猫を寺さつて来て、オコウという名前つけて可愛がつてたそうだ。尻尾の方は「ご

んぼとら毛」だったもんだから、「ごんぼとら毛」とも呼んで可愛がっていたそう
だ。ところが近頃になって、毎晩、夜遊びに出る。朝方になつど何もして来ない
ような顔してもどつて来ると。それから約半年も続いたと。和尚さんは不思議に
思つて、ある晩どこに行んか、小僧さ後付けらせた。ところが、小僧が猫の後を
ついて見えかくれして行つた所が、山の奥の奥山だったと。その奥山さ大きな、
十畳敷ぐらいの岩だったそうだ。その岩で奥山中の獣がみな集つて、テンでも、
いたちでも、狐でもシシでも、ムジナでも全部集まつて踊りおどつていたつたと。
その踊りの文句は

〈常慶寺のごんぼとら毛　ござらねと

　　なんだか拍子が　整わね〉

というんだと。そいつを狸の腹太鼓で踊っていたんだと。

猫が行くと、にわかにな

〈常慶寺のごんぼとら毛　ござつたら

　　拍子が　そろつた〉

と踊ったと。小僧は魂消て、家のオコウは大したものになってた、奥山の獣の頭になってたようだ、和尚さま語ったと。何だか不思議だと思っていたら、やっぱりそういうことかと、和尚さまも言つて、朝方になつど、知らねふりしてもどつて来て、和尚さまの前さつくねんと坐つて、

「長々御厄介になつたげんども、オレはこういうわけで山奥の獣の頭になつたから、この寺には、とうていいらんねから、暇を出してけろ」

と願つたと。和尚も小僧の話を聞いてたもんだから、手放すのもいたましいげんど、仕方ないところよく承諾してくれたと。んだげんど、長年厄介になつた恩返しもできない、ただ、オレが寺を立つた後、上杉様の殿様がなくなる。そのとき一天にわかにかき曇らせ、その棺を天上さ釣上げる。そして、米沢の和尚さんが、なじよなありがたいお経を読んでも、絶対棺を下げね。そこで和尚さまのとき、お経よんだ後さ、「オコウ、火車」という言葉をつけてけろ、そうすつど直ちに暗雲晴れて、棺を下げてよこすから……と言ひ残して寺を出たと。ところが猫のいう通り、上杉様ぼつくら逝くなつた。そして野辺送りの行列の途中、一天に

わかにかき曇り、雷雨となった。そして棺が天上さ釣下った。見送りの者が、あれよあれよといううちに天上に上って行った。

和尚さま方が、なんぼ有難いお経あげても棺が下らね。

「仕方ないから、南原から常慶寺の和尚よんで、お経あげさせろ」

ということになって、和尚は駕籠さのつてかけつけて、お経よんだ後、「オコウ、火車」という一語つけたと。そうすつど、直ちに暗雲晴れて、棺が元の蓮台さおさまったと。

（柶塚 佐藤宇之助）

米沢市南原には「狐のくれた文福茶釜」の伝説があるが、その寺のことかどうかはわからない。これと同じ話は米沢市には一般に知られ、窪田の千眼寺に残っている。「雨夜の伽」に見られる。

27 おぶさろの化物

むかし、孝行な息子いたったと。ところがその部落に小川が流れていて、橋掛かつていたと。その橋の下から、夜ふけになると、

「おぶさろー、おぶさろー」

と声かけて、得体の知れないものが出てくるということだったと。誰もその姿見たことないげんど、そういう声するもんだから、夜になつど、誰もそこ通らんねくなつたずだ。その孝行息子は村人ばおっかながらせるものだれば、

「オレが見届けてくる」

と、夜更けに行つたら、

「おぶさろー、おぶさろー」

と出て来たと。

「おぶさっだいごんだら、おぶされ!!」

と、背中出したら、まず、何十貫目とあるようなものが、おぶさつたと。どつ

こいと背負^{ふた}つて、家さ帰つと、台所さおいてみたところ、行灯^{あんどん}の光で見つど、大きい瓶だ。蓋^{ふた}をとつてみたところが、すばらしい黄金だつたと。

(桐塚 佐藤宇之助)

白鷹町にも同様の話があり、ストーリーもほぼ同じであるが、白鷹町のものは、「だから化物はこわくない」と言い、赤湯のこれは孝行息子の話になっている。

28 左平ばなし (二)

(1) ネズミとり

冬になつど、百姓はみな藁仕事していると。左平は賭好きで、
「いやいや、あそこに四つの足の鳥いたつけ、四つの足の鳥、籠さ入ったけ」
「この野郎、四つの足の鳥なんていないべちや、鳥あ二本足だべちやえ」

「ほんじゃ、賭すつか、いたぜ確かに」

「あんまりええ、賭すんべ、四本足など持っている鳥、世の中にいないから、オラだ勝ったぞ」

「いやいや、お前の負だ。実際見て来たなだぜ、籠さ入ったな」

「んじゃ、行ってみろ」

というもんで、みな行ってみたというんだな。そしたれば、やっぱり鳥籠さ猫入ったけど。

「ほら、見ろ四つの足の鳥いたどれ」

「鳥であんめえちやえ、猫だごで」

「鳥だごで、ネズミとりという鳥だごで」

そして左平に賭負けたというのだと。

(柵塚 佐藤宇之助)

(2) 田植の名手

四角い田さ、真ン中に、ちよぽつと入って、ぐるぐると丸く植えた。そして植上げたところを見ると、横縦十文字、全部整うがったと。

「ずいぶん、左平さんが植えた田は、曲んねもんだな」
「んだからよ、オレ泣いっただなよ」

と左平が言うたと。

「秋さなつて、曲んね（穂が曲らない）と思つてよ」

（柵塚 佐藤宇之助）

(3) 酒の只呑み

左平という人はトンチで、人の酒を年中呑んでつから、

「今日は、あの野郎嵌めないで、小屋で酒呑みしろ」

というわけで、藁仕事明けに、藁しどきに、左平さ教えねで、蔵の戸びつしり閉たてて、肉だの魚だの買込んで酒呑みしたんだと。

ところが左平は知ってたもんだから、

「野郎べら、俺どこ嵌めない気だな。よし、嵌めないごんだら、また只で呑んで呉くれんなね、んだげんど、なじよしてこの蔵に入ったらええがんべ」

左平、味付けたと。

「やーい、こぼれつから、開けて呉けろい」

「なんだ嘘こぼばつかして、開けるなで」

「ほんによい、零こぼれつからよい、何にもなくて、一升枡さ酒買って来たんだず。
零れつから開けて呉けろ」

野郎べらも、とんと本氣したと。

「常に只ばかり呑んでいるから、今日は一升買つて来たどこがれ」

と、蔵の中、ガラッーと開けたと。そしたら、何も買つて来ねずだい。

「いやいや、寒くて涙こぼれつず」

と蔵の中さ入って行つたと。

「いや、あそこで夫婦喧嘩みてきた。いやいや、妻ががが親父（夫）にぶんなぐらつじやらば、妻怒がつて火箸持たつて、親父の頭くらすけつどこ、親父あ、何もないもんだから、ちよつと鍋の蓋とつて、こう受けたのよ」

と、鍋の蓋とつて頭にかざしてから、

「あらら、うまいことしつたな」

と鍋の中を見て、とうとう左平に吞まつだけと。

（柵塚 佐藤宇之助）

29 十分五分兄弟

むかし、十分と五分という兄弟이었다と。父親に早く別れて、父親の家業の小鳥とりしつたんだと。

ある日、十分と五分で、鳥の通るところさ網かけた。ところが十分は用を思い出して、

「五分、五分、オレあ用達^たしてくるから、網を番してろ。網に掛つたものは親でも子でも逃がさず獲っておけよ」

と言置いて用達しに行つたと。ところが何時まで経つても何も掛んねがつたと。そのうち昼間になって、母親は十分と五分さ弁当持つて来た。ところが年寄つて目が見えねもんだから、網さ掛つたと。そうすつど、五分は物陰から出てきて、
「さあ、掛つた」

というわけで、「何する五分」と言うのも聞かねで、五分はこんがえ大きな棒^{ぼう}で叩いたと。

「オレは兄にやに、親でも子でも逃がさずとっておけと言わっだから、とんなね」と、母親を殺してしまったんだと。兄の十分が来てみっど、蓆かぶっているのがある。

「何か掛ったか、五分」

「いや掛った。おら家の母掛ったっけな。嫌だ嫌だと言うけれど、引っぱたきつけて、殺して、そこさ蓆かぶせておいた」

と言うたと。

「この野郎、何も親でも子でも逃がさずとれというても、そいつあ鳥のことで、自分の母殺したり、まったりさんねごで。んだげんど殺してしまつてから仕方ないから、葬式さんなね。葬式するつたて、一文の銭もない、困ったもんだ」

と、思案したあげく、村一番の金持さ行つて、盗んでくるより他ない。金持の家の台所さ、金の入ったフクベン下げていたと。夜寝しずまつてから、十分五分の兄弟がその家さ行つて、フクベン見付けたと。ところが兄は五分さ、

「フクベンの尻押えていろ、オレは鎌で縄切つから」

と言ったところが、五分はフクベンの尻でなくて、自分の尻押えっだと。

「ええか、五分」

「ええ」

というもんで、十分が縄切ったところが、そのフクベンが板の間さ落ちて、すばらしい音立てたと。そら泥棒だというもんで、家内の者がみな出たと。十分は賢いから、逃げたげんど五分は逃げ遅れて、便所さ隠れたと。

年寄のばさまが起きて来て、泥棒さがし助け^すつかと思つたげんど、尋ね^たらんねくて、小便して寝つかと思つて小便たつで、後、掴み鼻したら、隠れていた五分さ引掛つたと。五分は隠れていたの忘つで、

「汚ない、ばさま」

と言つたと。そこで五分は家の人に抑えられてしまつたと。そして段々聞いてみたところ、母^がの葬式出す金を盗みに来たと語つたもんだから、

「そげなことなら、にさ（お前）借り^に来んなねごで」

と、葬式の金もらつて帰つて来たと。そして十分に、

「兄にや、オラだこういうもんだ、^{あん}錢など盗むことないもんだ。借りにさえ行くと、こうして貸してくれる」

「お前抑えらったのか、んじゃ仕方ない、この有難い金で、葬式出すべ。ただ葬式出すええげんど酒もない、オレ、ドブロク^{こしや}拵うから、お前寺さ行って知らせて来い。寺の和尚さまざあ囲炉裡^{いろり}ばたに黒い衣着て坐っているもんだ」

と教えらつて、五分は寺と行ったと。

「今日は、今日は」

と行ったところが、囲炉裡さ熊猫いて、ニヤーンと鳴いて逃げて行ったと。そして和尚さまさ会わねで家さ来てしまったと。家さ帰って、

「和尚さま、何時ごろ来てくれっか」

「なんだか、今日はと言ったら、ニヤーンと逃げて行った」

「そいつあ熊猫というもんだ。駄目だ。オレが行ってくるから、ドブロクの番し
てろ」

と、五分は瓶さ作ったドブロク搔回^{かま}し方した。ドブロクが醗酵^{わい}して、ジブゴ

ブジブゴブジブゴブというから、五分は、

「十分は寺さ行つたし、五分はここさいた」

と言つた。ドブロクはまたジブゴブジブゴブジブゴブというので、もつと大きい声で、

「十分は寺さ行つたし、五分はここさいる」

と言つても聞かないで、ジブゴブ言つてるもんだから、五分は木尻きじりから大きい板もつてきて、瓶をぶち割つてしまつたと。そしたら、ドブロクはみな流つてしまつたと。十分が家さもどつて来て、

「ドブロクはええ塩梅出たか」

と言つたところ、その有様なもんだから、仕様ないもんだと言つてだどこさ、和尚さま来てしまつたと。

「んじや、ドブロクで温たまつてもらわんねから、風呂でも沸して、温つたまつてもらうしかない」

と風呂焚いたと。そしたらなんぼかぬるいかつたと。風呂番してた五分さ、和

尚が、入っていて、

「五分、五分、あまりぬるいから、そこらさあるものみな焚くべて、もっと熱くしろ」と言つたところ、袈裟も衣もみな焚くべてしまつたと。

「こんどはええ塩梅だ」

と温たまつて上つたら、袈裟も衣も何もなく、禪一つでお経上げて、ほうほうの態で帰つて行つたと。ところが大変なお布施忘れたずなたた。

「五分、五分、お布施忘れたから、持つて行け」

「おい」

と、戸口から五分は、コシキ棒（雪はき棒）もつて追いかけて行つたと。

「和尚さま、お布施忘わすつた」

と呼んだもんだから、この寒いのに、禪一つでお経上げて、お布施も貰わねでいらんね。と待つていたところ、折悪しく、そこは堀の傍で、五分はコシキ棒で堀の水を和尚さまさ掛けて、

「まだ冷ひえねか（まだ布施ねか）まだ冷ひえねか」

と、とうとう和尚さまを殺してしまったと。んだから、馬鹿さつける薬さないっ
けと。とうびんと。

（桐塚 佐藤宇之助）

あとがき

請われるままに、民話の雑談を生徒にやったのが縁で、数名の生徒諸君と昔話の採集をすることになった。古いことを集めるのではなしに、新しい世界に目を向けるためである。昔話がどう語られ、どう受け継がれて来たかを、次の時代の母になる生徒の目で確かめ、その中から新しい次の時代を自分の手で探り当て、創って行くかを考えることは重要だからであり、私の民話に対する接近の端緒もそこにあり、今後もその点で変わりが無いと思うからである。

赤湯町が南陽市になる。単にそれだけの理由ではなしに、村山文化と置賜文化の接点であり、小国を通して入って来た越後文化の末端でもあり、温泉を背景として、大きく変貌して行く赤湯町の昔話は、今採集しないと消滅してしまうと考えられるからでもある。一昨年『こうれん物語』として赤湯町の昔話と伝説をまとめたが、極めて不完全でもあったから、その完成へのもう一步のつもりもあった訳である。

大変幸いなことに、よい話者とよい調査者が協力をしてくれたので、短期間に大きな収穫をあげることが出来た。話者は次の通りである。記して感謝申し上げる。(敬称を略す)

山崎みやの	61才	宮原
山崎ヨシエ	41才	宮原
新関光造		金原
川井遠江	77才	大橋
川井弥右衛門	55才	大橋
三瓶ちの	61才	大橋
高橋照太郎	70才	上野
佐藤宇之助	64才	梶塚
坂野忠男	70才	二色根

その他に、大橋の丹野きのさんには、多大の御足労をお掛けした。調査に当たったのは次の三名と私で、特に佐藤宇之助さんの分は少々調査が遅れたために配列

が十分でないが、大体柳田國男の配列を参考にした。

鈴木光子（赤湯町） 米沢東高等学校二年

安部正子（赤湯町） 同 二年

根津悦子（米沢市） 同 二年

なお、伝説については、幾つか話を聞き、資料を見せて頂いたが、昔話に中心を置くことにしたために、編集の都合で取り上げなかったが、近々予定している調査を、伝説にしぼって集大成したいというのが私たちの念願である。今まで集まった伝説は次の通りである。

- 女沢と祖父ヶ沢山の伝説（坂野忠男） 釜渡戸
- 夜泣き地藏（坂野忠男） 釜渡戸
- 相生の松の伝説（坂野忠男） 釜渡戸
- 宝生の玉（佐藤宇之助） 櫛塚
- 弥三郎婆（佐藤宇之助） 高畠
- 犬宮の伝説（高橋照太郎） 高畠

○ 猫の宮の伝説

（高橋照太郎） 高畠

いただいた原稿はそのまま保存して、次回に整理したいと考えている。悪しからず御了承いただきたい。

赤湯の民話に変質や省略や消滅をよぎなくされていることは、『こうれん物語』の「あとがき」に記した。今回の採集でも同じことが言えるし、よりそれが明確になったと言つてよい。その原因は経済的原因から来る生活の変化、親子関係の断絶に求めることが出来るであろうが、その原因の追求は歴史的な観点も必要なことであるし、他に譲るとして、ここでは、民話そのものの変質がどんな形に現れているかを考えてみたい。

先ず第一に昔話の中の唄の部分が消えてしまったことである。「瓜姫子」の中にある「瓜姫子の機さ天邪鬼アのりこんで、キーコラボタン」という唄が宮原で語られたが、「お糸唐糸」「猿舂入」「なら梨とり」「天邪鬼蛙」にあったと考えられる唄の部分が消滅してしまったために、ニュアンスが欠け、又子どもの昔話に対

するイメージが弱くなつてしまつたことは十分考えられることであらう。

第二に、昔話がいくつか混乱してしまつてゐることである。「お糸唐糸」の話の中で、最後にお糸は月に、唐糸は星に、父は太陽になり、継母がモグラになるが、これは明らかに「お月お星」との混乱であるし、「かわうそと狐」の宮原で語られたものには「狐の尻尾が抜けてしまい、その傷に猿が来て、南蛮味噌の薬を貼つてくれる」が、この話は「かちかち山」系の昔話が混入したものと思われる。

第三には、笑話系の昔話が伝説という形で主に男の人によつて語りつがれてゐることも大きな特長といえる。しかしこれらの笑話群は「米沢藩」時代に作られたものと考えられ、比較的新しいものと想像される。語呂合わせ的なものも多く、江戸時代の黄表紙などの影響が考えられよう。その反対に古典的とも言える昔話の少ないことは、そのまま赤湯の民話の特長につながるものではないだろうか。「左平ばなし」「十分五分兄弟」に代表されるこれらの笑話は、幼年期ではなしに、少年期から青年期に、そしてまた男子の間にだけ語り伝えられたものである。しかも「左平ばなし」の一つ「酒の籠抜け」に見られる面白さは、伝説的奇人と結

びつく要素を多分に持ち、決して健康な笑いをさそうようなものでないのみか、むしろ倫理を無視することで自分をも否定してしまう方向を指向するものでしかない。人間の生活と根底に於いて結びつきを持たぬものであろう。

親と子へ伝達されることよりも、親から孫に伝達されることの多い昔話に対して、父から子へという伝達の仕方が、この「笑話」には多いようであることは話者が誰から聞いたかを質して理解できる。そうしてみると、勸善懲惡の裏返しされたものが「笑話」に他ならない。しかも寝太郎話のように静かに語られるものと比較して、一口話的な左平話は、現実に存在し、または存在するのではないかと思われるような、制度・秩序からはみ出した人物に仮託しての笑話はトンチ話というよりも駄洒落に近くなるのではないだろうか。

話に聞くと、種々の講はほとんど行われていない。庚申講・大宮講・念仏講などはほんの少数である。それにかわる契約も、昔は其の年の反省と次年の計画を立ててから飲食に入ったものであったそうであるが、現在では勿論、飲むことだ

けとなつてしまっているし、契約の意味を失ってしまった。このような中では世間話さえも行われないうことになったといえる。世間話と結びつき変質して来たと考えられる昔話は、老人たちの言う通り、急速にすたれて行くであろうが、残しておかねばならぬものと、残す必要のないものとを、はっきり区別した上で、残すものは残して行くことが大切だと思われる。以上の意味からも、私達の行った昔話採訪は無意味でなかったと思う。

一九六七年一月

なら梨とり 赤湯の昔話

昭和四十二年一月十二日 印刷

昭和四十二年一月十五日 発行

編・調査 武田 正 赤湯町桜木町

鈴木光子 赤湯町赤湯

安部正子 赤湯町赤湯

根津悦子 米沢市玉ノ木町

(米沢東高等学校内)

山形短期大学民話研究センター資料叢書

なら梨とり

赤湯の昔話

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十一年十二月二十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつばの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌ才さんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』（一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊）

『置賜平野の昔話（一） 民話のこころ（対談）浜田広介先生と海老名ちやうさん』

（一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊）

『置賜平野の昔話（二） 海老名ちやう昔話補遺』

（一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊）

『たかみねと秋田の昔話』（一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊）